

受賞者のその後の取組（平成 29 年現在）

<p><b>平成26年度 農林水産大臣賞</b> 「事業所・地方公共団体等」分野 <b>受賞</b></p>	受賞者名 <b>株式会社伊藤園 日本製紙株式会社 凸版印刷株式会社</b>
	所在地 <b>東京都渋谷区、東京都千代田区、東京都台東区</b>
	受賞テーマ <b>持続可能な消費を実現した、常温流通可能な新・環境配慮型紙パック飲料容器</b>

1. 活動継続 あり

紙素材にアルミ箔を使用せず、リサイクルが容易な環境配慮型紙パック飲料容器である「ECO 容器」として、2014 年 3 月に販売を開始。リニューアルを経て、現在も販売を継続している。

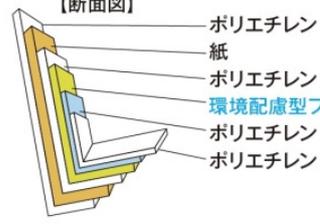
**環境も 充実** 環境にやさしい「ECO容器」  
牛乳パック同様にリサイクル可能



【ECO 容器 (200ml 紙パック製品) について】

【断面図】

- ポリエチレン
- 紙
- ポリエチレン
- **環境配慮型フィルム**
- ポリエチレン
- ポリエチレン



**紙パック**

長期常温  
保存可能

近年、お客様の環境に関する意識が高まるなか、新たな取り組みとして、アルミ素材を使用せずに**リサイクルができる「ECO容器」**を採用しています。

**「ECO 容器」は、各方面で  
ご好評を頂いております。**

- 2014 年 日本パッケージングコンテスト  
飲料包装部門賞
- 平成 26 年度 リデュース・リユース・リサイクル  
推進功労者等表彰 農林水産大臣賞
- IAUDアワード2014  
サステナブルデザイン部門 受賞
- 第11回エコプロダクツ大賞エコプロダクツ部門  
エコプロダクツ大賞推進協議会会長賞
- 第25回地球環境大賞 環境大臣賞

2. 活動の広がり あり

- 2014 年 3 月の発売以降、2015 年 2 月、及び 2017 年 3 月にリニューアルを実施。現在、「ECO 容器」を採用した野菜飲料は、「充実野菜 緑黄色野菜ミックス (すりおろしにんじん)」、「同 緑の野菜ミックス」、「同 シリアルミックス (野菜とシリアル)」及び、「朝活野菜 Morning」(2016 年 10 月 3 日発売) の 4 品を発売中。



- 現在、「ECO 容器」を使用した野菜飲料の生産委託先は 2 社であるが、このうちの 1 社が新たに高速充填ライン（従来の約 1.5 倍の生産能力）を増設し、生産能力を拡大、2017 年 4 月より稼働を開始している。

3. 活動の進化 あり

3R 推進功労者等表彰受賞後、社会からの評価として以下の表彰を受賞。

- 2014 年 日本パッケージングコンテスト飲料包装部門賞
- IAUD アワード 2014 サステナブルデザイン部門 受賞
- 2014 年 第 11 回エコプロダクツ大賞エコプロダクツ部門 エコプロダクツ大賞推進協議会  
会長賞
- 2015 年 第 54 回ジャパンパッケージングコンペティション経済産業省製造産業局長賞
- 2016 年 第 25 回地球環境大賞 環境大臣賞

4. 今後の計画

今後はさらに「ECO 容器」を採用した商品を増やすとともに、委託生産先の工場を拡大し、紙パ  
ックリサイクルの推進への取り組みを強化していく予定。

(次頁に表彰概要掲載)

## 【表彰概要】

PET ボトルの回収率が約 80% (2012 年度実績) となっている一方で、牛乳などの飲料用紙パック (アルミ箔不使用) の回収率は 33.8% (2012 年度実績) と PET ボトルに比べて低く、更にアルミ箔を使用した紙パックの回収率はわずか 3.3% (2012 年度実績) に過ぎない。

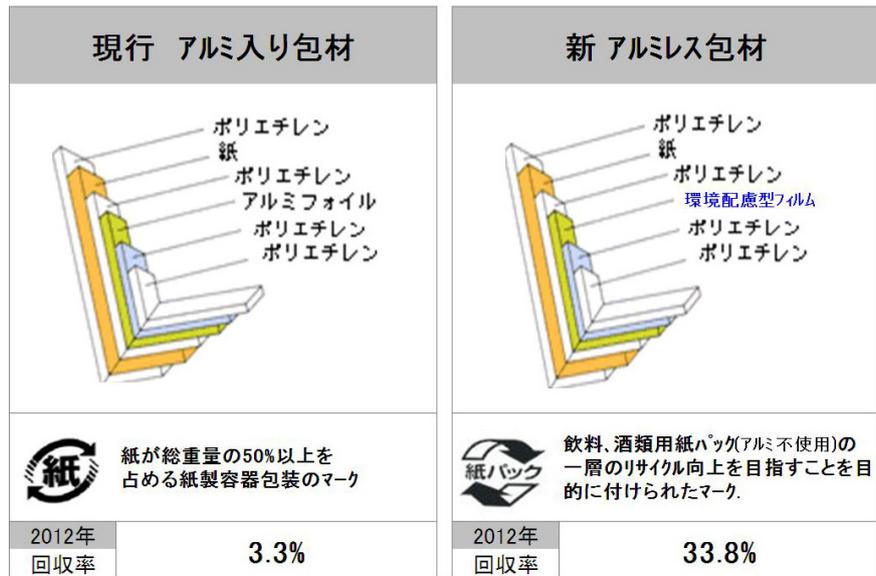
そこで、伊藤園、日本製紙、凸版印刷の 3 社は、紙パッキリサイクル率向上に少しでも貢献するため、新たに「レンガ型アルミレス紙パック飲料容器 (以下、本容器)」の開発に着手し、約 4 年にわたる試行錯誤の末、完成した。

従来のレンガ型紙パック飲料容器は、光や酸素など品質が劣化する要因から内容物を守り長期保存するために、紙素材にアルミ箔を積層した複合素材を使用している。飲用後に容器のリサイクルをするためには、紙とアルミ箔を分離しなければならず、その手間と分離の難しさから、多くがゴミとして廃棄されている。

そこで 2010 年、飲料製造メーカーである伊藤園は、当時、主として食品・トイレットリーなどのパウチ包装に使用されていた GL フィルム (凸版印刷社製) に着目。同フィルムはアルミ箔と同等レベルの酸素および水蒸気等に対するハイバリア性を持ちながらも紙パックに応用すればリサイクルが容易になることから、製造会社である日本製紙に協働の提案を行った。

同フィルムは、これまで量販店等で販売されているレンガ型紙パック飲料容器への採用実績はなく、安定性・安全性・生産効率などの面で課題があった。

例えば、アルミ箔に比べて剛性、導電性が低い GL フィルムを使用した紙容器では、従来、食品工場で使用されていたアルミの導電性を利用した密封性検査機器が使用できないなど、製造上の問題点も多く存在した。これについては、新たなピンホールチェックの仕組みを導入するなど課題を解決した。



約 4 年にわたって課題解決を図った結果、2012 年に酸素透過性等で、従来製品とほぼ同等の品質保持性能を持つ本容器の開発に成功し、常温流通可能な野菜飲料のレンガ型紙パック飲料容器として初めて、牛乳などの紙パックと同じリサイクルルートに乗せることが可能となった。

持続可能な消費に大きく貢献しうる容器として、2014 年 3 月 3 日販売分から導入を開始した。同社の販売実績から推測すると、年間約 100t の紙容器が新たに回収されリサイクルに供される計算である。